

国語学概論(II)

渡部 和雄

(昭和56年10月31日受理)

一

文学が論理言語表現に翻訳されるためには、宇宙的な人間の運命についての判断力が必要なのではないか。国家公務員という自己同一性が語れる〈論理〉というものはない。

道を歩きながら考える。文学の学問というのは、対象と自己に関わるある種の関係である。それは自己同一性としての作業ではないものである。

宇宙がそれ自らするドラマを表現する言葉が人間に可能なのか。それなしにはすべての論理はひたすら余興にすぎない。

ここに〈距離〉を置いてみるという吉本隆明氏の方法は面白い。宇宙がするドラマという人間化は〈距離〉のようなものの上に現前するだろう。あらゆる人間的なものが現われるのは〈隔たり〉においてなのだ、一応は考えられる。

美人は遠くにありて、だから距離が0になった家族では美醜が解消するというリクツはありうるものの、家族でも人々は分離しているのではないか。給料取りがいて、主婦というものがいて、何人かの受験生がいる時、これは人間というものの基本的な分離ではなからうか。分離こそは距離の別名に外ならず、夫婦は解消された美醜だというのは却って、家族というものからの因襲であろう。

生存において距離がないのは生産共同体性に於てのみ可能である。その生産共同体を廃棄しつつ作り上げられたものが律令国家における、家族代表者の給料制生活であったから、その家族には可愛い子がいたり憎らしい子がいたりした。共同性のないものを家族としてまとめ、家族は倫理的に美醜を失ってきたのである。本質的に分離性であるものをまとめるとは儒教や仏教が必要であった。宗教がいかに

に美醜を失うべき努力であつたかを考えてみればいい。

二

歴史というのは文明の性質であるとすれば、歴史によって拒否されたのは農耕生産共同体である。文明によって合法的他殺 \parallel 死刑を行われるのは生産共同体の性質なのである。人間に距離というものがあろうとしたら、この歴史という文明の性質と生産共同体の間にかあるまい。人間にとつて距離とは文明からの被虐の度合である。

いわば、これが被虐の生態なのであろう。とすれば被虐の生態が距離なのであろう。被虐の成立は法律が信じられた度合であり、法律を肯定することの度合と、軽蔑を肯定できることの度合は、多分ひとしい。こうした環境で、人は言葉によって何かを知ることが決してない。多分、人間は人間らしいことの一切を素通りして行くしかない。透明みたいところがあつて、そこから発想すればある言葉が成立してくる。被虐の度合としての距離のせいであらう。

金づちで釘を打つとき、釘の頭の広い部分が金づちの衝撃をうけ、その衝撃がそのまますつかり釘の先端に伝えられる……。極端な不幸というものは、肉体的な苦痛でもあり、また、たましいの懊悩、社会的な失墜でもあるのだが、いわば、この釘みたいなものである。その先端が、まさにたましいの中心に触れている。釘の頭は、空間と時間の全体にわたつてひろがつた全必然性である。

不幸は、神のおどろくべき技術の妙である。……神と被造物との間をへだてる無限の距離全体が、全く一点に集中して、たましいの中心に穴をうがつのである……。釘を打ちこまれていても、じつと神の方へと向けられたたましいを持っている人は、いわば、世界の中心に釘づけられているのである。それこそ、真の中心であつて、単なる真中ではなく、空間と時間の外側にあり、神そのものである。(シモーヌ・ヴェイユ『神を待ちのぞむ』)

さてこうしたヴェイユの在り様の「へよみ方」を吉本隆明氏は「貴種流離譚」のようによむ。

西欧でいえばどうなるかと言いますと「神」が乞食みたいな恰好をして、だれにもわからないように街々を訪れてくるというものです。そうすると人間は「神」だとぜんぜん気づかない。むしろ気づかないだけでなくて、それは乞食じゃないか、薄汚いやつじゃないかといつて敬遠しようとする。「神」の方は「乞食の方といつてもいいのですが」、それでもあとを追いかけていく。あるいは別の姿にかえて、たとえば美人の姿にかえて追いかけていく。すると人間は、なおなお拒否する。しかし拒否しているうちに、につち

もさつちもいなくなつて、だんだん苦惱してしまふ。そして苦惱がふつとはずされたときに、ああ、そうかとへ神の正体に気がつくといふものです。(シモーヌ・ヴェーユの意味『言葉という思想』)

これはへ神が苦惱の中に、不幸の隣りにいる、といふことなのであろうが、その神が(姿をかえて)「あとを追いかけていく」というのは、「神を待ちのぞむ」という人間側の在り様と同じことなのであろう。だから貴種流離譚というのは人間がへ考える型なのである。考えるといふことはこうした型を取るしかないのだというわけであらう。

それは、歴史的にも、宗教的にも、この図の様な形をとり、アブラハム、モーゼ、パウロがそう思い行動し、古事記も竹取物語も伊勢物語も源氏物語もそう書かれてゐる。人はへ考えといふ糸を手ぐると、そういう構図が現われるのである。思い出を「追いかけていく」と、その構図が姿を現わすのである。

天・神の性質

地上、さすらいの性質

民話には万国共通なだいたいふたつくらいの大きなパターンがあります。万国共通だといふことは、民衆が古い時代から語り継いだり作りあげたりする物語はだいたいおなじことを指すことを意味しています。そのパターンは、ひとつは日本流にいきますと、貴種流離譚です。……もうひとつはへとりかえばやへ物語というのがあります。(右同・吉本隆明)

という思い出の糸のつむぎ方は似ている。天と地、貴と賤、男と女などの概念をめぐる関係である。何のことはなく、生産共同体性の否定性、歴史と文明からの被虐の度合である。

この思い出での糸をつむぐ音声化がへ物語ることである。だからへ物語るといふこととへ考えることは同一次元のことである。人が語るの思い出を語るのである。

人は高橋たか子氏風には、

「靈魂に会えるのですか」

「強い祈りによればです」

「どんなふうにするのですか、教えてください」

「……祈りです……」(『怪しみ』)

という祈り、上に向いてゐる。

聖書風には、

はじめに御言葉があつた

御言葉は神であつた

御言葉は人となつて

われらのうちに住まわれた(ヨハネ)

と上から下に、人界に。というように、人から神に、神から人という風に交流する。

こうして、〈考え〉〈語る〉ということは距離の性質だつたり、角度の性質だつたり、その故に〈裂け目〉の性質だつたり〈矛盾〉の性質だつたりする。いわばそれは歴史というものととの共同体を志向しているのであるが、その基盤は文明からの被虐なのであろう。

〈考える〉というのは人間における〈原罪〉なのである。だから人間の歴史の初めに〈原罪〉をおいた人達は一番人間的であつたのかも知れない。

三

〈人間〉は原罪を背負つて生まれてくる。だから我々が生きているのは罪なのだ。としたら、人が考えること、そう人が考えることがあるとしたら、〈罪〉について以外のものではない。人間と罪と言葉は三位一体である。

そして考えることの内容は宗教と文学についてである。それだけが原罪に関わりうる言葉だからである。(罪でないなら思い出もあるまい) いわば罪と手繰りよせるようなもので、それ以外の一切の思考というのは、人間の言葉の浪費である。

こうしたことは何物かが仕掛けたワナのようなものであつて、それを思い出すことに言葉は利用され、だから言葉の学問も同様に言葉なのであつて、その言葉はひたすら手繰りよせる様に使われる。知識というのも思い出し、手繰りよせる糸なのであろう。言葉と学問と知識は同じもので、つまりは思い出す糸をつむぐことである。

それ以外のものはない。それ以外の言葉は自己の現存在の弁護＝合法化としてあるだけである。即ち原罪なしの生存はありえないところに、その生存を合法化し、弁護するのはひたすらズルサ以外のものではなく、それは悪魔の言葉である。

宗教や文学がいわゆる学問になつてゐるのは、それでも人間のウシロメタサのせいなのであろう。罪ほろぼしというわけである。

多分こうした時、人は、文は主語と述語で出来ているなどという発見をした。思い出の糸が切れて、法秩序という外在に自己を委ねたわけである。それどころか、この文明的発見は、思い出を繰り返し取る手を拒絶するように作用する。この発見は当然人生を隠蔽する。話しつづけるが、いや話しつづけるが故に言葉を失って行く。文明が思い出を疎外するのである。

また考えること、思い出、記憶が思想の別名であるとして、思想のない学問などありはしないから、その思想は悲劇性に於てしかないから、悲しみに行きつかない—幸福な—学問など余興にすぎまい。

人間の男女のエロスの関係は、精神の関係であれ、また〈距離〉が接近して肉体の関係であれ、関係自体が悲劇性だという本質をもとになり立っています。(ホーフマンスタールの視線『言葉という思想』)

というにひとしく、学問も悲劇としてしか成立しない。悲劇に行きつかない論理は論理ではない。それは言葉にとって論理とは悪魔の誘いだからである。

言葉に於ては文だけが論理の完成なのである。そして思い出すことは一つしかない。

キリストが

話し終った時、死んだ、ということ

いや

死んだ時、話し終ったのだろうか

四

多分、生産共同体をズリ落ちた時、即ち文明という歴史が成立した時、へ人であることは、呪われた不幸を索めるしかない。不幸を探しつづけることが、(人間の)不幸といわれるものなのだろう。

不幸な者は歴史に似ている。歴史的存在である人は不幸を求める。(その時、幸福は歴史にだけ似ていると思つたのだろうか。だから、ここで人は不幸を信ずることができた。)歴史のないものに不幸はないだろう。

不幸は原罪に似ていた。不幸を探して行けば〈原罪〉のようなものが見えてきて、それは文明とは幅、距離、角度、矛盾のようにある。原罪からの歴史が余興であるように、原罪からの宗教も余興である。だから、考えるとは余興から原罪へ、という構図なのである。

それは論理Ⅱ言葉による知性によつてではない。コリント書に、

又我に言の智慧を用ゐしめ給はず、是れキリストの十字架の虚しくならざらんためなり。

などという言葉がある。人間の感覚に関わるある関係によつてゐる。また、

世が我らを解し得ざるは、我らは今能力と智慧とを自己に於て有たずして、我らの救主イエスキリストに於てこれを有てばなり。ともいふ。余興から原罪へは酔っぱらいの論理としてしかない。

としたら思い出の糸というのは向うの側から繰り出してくるものらしい。現実的には〈歴史〉は向うからやつてくる。文明である側から未開であるものへの憎悪のような形で姿を見せる。それへ被虐という立場で立ち向う意識は当然文明からはやつてこないから、無的本能の様な言葉によるしかない。

おまえたちが裁判所とか衆議所に引き渡されたときに、どういふことをいつて云い逃れようとか、あるいはいまの言葉でいえば、どういふふうに黙秘するかというふうなことをおもし患うなといつています。ただそのときに授けられた言葉を云えばいいと述べています。マルコ伝の言い種によれば〈言葉〉というのは、魂が云わせてくれるのだから、聖書が云わせてくれるのだから、あらかじめめかんがえることはいらないといふのです。

これを思想的言葉に云い直しますと、じぶんにかかがあるとすれば、そのときに云われたあるがままの、自然状態で口をでてくる言葉がじぶんの持ち物に背かないものだという事のように受けとられます。……

マルコ伝は〈言葉〉は授けられたものだ。そして〈言葉〉を云わせるのは聖霊だから、あらかじめ何を云おうとおもひ思つたりするなどと述べているのです。その個処が〈言葉〉が信じられてゐることを象徴しています。(喩としての聖書『言葉という思想』)と「言葉が信じられる」のは、「自分に何かがある」と「言葉を云わせる聖霊」との一致によるように吉本氏はここで云つてしまつてゐる。

ここで〈話す〉ということは神を思い出すことであつたといふのと変らない。神を思い出さない話し方は何も話してゐないことになる。それは歴史と文明の話し方であり、この話し方は〈話す〉ことを破壊しつづける。

歴史と文明によつて殺されるものは未開と暗黒の性質である。未開と暗黒が沈静していたら、それは歴史と文明による自然死としてあるが、未開と暗黒が充実し、溢れ漲ると、それは公開他殺死のように現われる。

文明は未開を憎悪する。「不幸」＝「釘の頭」が「空間と時間の全体にわたってひろがった全必然性」(ヴェーユ)であるとする、言葉はキリストの死と共に終わった。即ち未開と暗黒の漲る性質であった。創らないことは壊していくことでしかない。

歴史(生き残るもの)が人間的(人道主義的)な顔をしてみることもあるが、しかし生産共同体性の漲り溢れるものは「死への言葉」
となるだけであろう。

五

日本人はどうしてこうも話が下手なのか、と思い出してみたら、それは日本人に、思い出すこと、原罪がなかったせいだろうと思うし
かあるまい。

パウロほど、原罪という神の性質を思い出し、故に言葉を話した人は珍らしい。そのパウロについて『パウロの歩いた道』NHK 55・
1・25テレビ)、曾野綾子氏が、

「人生は失敗でいいのだ」

と話していた。それは文明が神からの失敗であるから、(神による)人生は文明からの失敗でいいのだというリクツになるだろう。

天照大神だってそうは違うまい。天の岩屋に入ると世界は暗くなり、岩屋の内部(標縄の向う)は明るくなるだろう。岩屋というのは
もともとくらがりなのである。その闇の中に神がいて、そこは明るい。そこが明るければ世界は暗いだろう。

暗い世界では、神の所は明るいし、神の所が暗ければ、明るさは世間に出たことになる。そうしたリクツなのである。

すなわち富める者にて在したれど、汝らのために貧しき者となりたまえり。これ汝らが彼の貧窮によりて富める者とならんためな
り。(コリント書)

貧しき者でありながら富める者でもあった、そういうこともできる。この角度、幅、距離、矛盾こそ言葉の出でるところだったのだ
から、これは文明からの被虐の度合、貧富という階級制の構造である。それはさて、汝らを富ませるために貧しき者となったという。
だから、文明の世界に「富める者」となった汝らは「貧しき者」でもありうるわけだ。キリストが富める性質であつて貧しいのだから、
富める者になったものはキリストにおいて貧しい者であつていいわけである。

こうしてパウロはリクツという非言語を表現してみせたわけである。だから曾野氏も「人生は失敗でいいのだ」などと言うことができ

るわけである。パウロも、そしてよく聖書について書く曾野綾子氏も、犬養道子氏も、思い出を手繰ることを忘れ、世間並の知性でキリストを対象化してみせたわけである。

いわばキリストの生きた話に対して、それを人に語ってみせたわけである。

彼らは誰がみたった百%ほどの成功者である。失敗というのは現実において成功の可能性が遮断されているものをいうのであって、キリストは事実上、成功の不可能者なのだある。対して彼らは〈失敗の不可能者〉なのである。

キリストが宗教になるにつれて、彼らはキリストの向う側に廻ったのである。文明における（従って理論的な）言語は自己を守る以外の表現を可能にしない。

今はみんな、日本人などは文明人だから、（教育というもので一様化したから）パウロのように喋ること、聞くことは殆ど不可能になった。文明である限りはパウロの言葉も知識のように対象化されて存在（話し、聞かれ）しなければならぬ。だからどんな文明人もパウロについて喋ることは〈新しい〉〈知識〉のようなものであった。（そこで、そうしたことを防ぐために、私が話しているのではないと、パウロ自身は言ったのだある）

聞が文明に話しかけることは本物の矛盾なのである。キリストが喋ったことと公開他殺は同一であった。故に〈ハナシ〉は全く転倒しているわけである。文明に殺されるのは生産共同体性の充溢以外の何物でもない。即ちその漲り溢れるハナシは歴史と文明における〈死〉なのである。

これだけ宗教的に対象化されてしまうと、キリスト本人が目の前に立つても文明はそれに気づかないからである。殉教は確実に独りであり、文明と知識の性質には独りは含まれていないからである。

パウロがキリストが我において喋るのだといった時〈原罪〉の性質をよく知っていたのであろう。原罪の構造、人間における角度や距離は個人にしか附随しないからである。この〈言葉〉は文明における死としてしか存在しない。だから〈人生は失敗であつていい〉わけだ。ひたすらの失敗で。

日本には思い出を手繰る、その糸の端が見つからないのであろう。話ができないのは原罪がないせいである。そしてそれは生涯における失敗、欠陥によっている。

思えば人間には〈生活〉であること以外には何も無い。具体的な事実、上つ面からだけでも、そうそう、文だつてダラダラと書いて行つ

てみるだけ。

六

それにしても、

たとえば手つとり早く言つて、ワイトゲンシュタインが「ペーターベンのあるソナタにおいて価値あるものとは何なのか。」という風に言つたとして、

かれにとつて「絶対に価値のあるものごと」とは「絶対に神秘的なものごと」であつて、それは有意義な言語の限界を超え出たものごとであつた。」(『ワイトゲンシュタイン』藤本隆志)

といつてくれば、へ価値あるものゝが在ると、とにかくワイトゲンシュタインは感じていた。森有正氏が繰返すように、経験は語ることに出来ない自己であつて、それに「世界の中には、いかなる価値も存在しない」から価値についても語ることはできない。としたら言語に於ては自己と価値は似ている。だからこれらについての言語表現は無意味なのであるが、それを言語上の無意味とおきかえると、これは法性言語以前ということになる。即ちへ私には価値が感じられるのである。自己が概念の普遍性に似るのは、法性以前、生産共同体性にある。ペーターベンはその共同体性の体現である要素を持つていたわけであろう。それが我と関連する。人はへ高さへについて話ができない、というワイトゲンシュタインは文字通りへ高貴なものゝを死守したわけである。(それは、その説明が誤まっているからなのではない、それが説明だからなのだ)

コリント書にも「汝らはなお肉に属す」というような言い方がよくなされている。「肉」というのは何より歴史の性質であり、生き残り続けるものである。それに対するものが「霊」であるとするれば、霊は反歴史なのである。そして「絶対に価値のあるものごと」がこの霊に属するものであるとすれば、それは文明の対極の無と暗黒の性質である。だから霊・神性・価値あるものは生産共同体性なのではないか。

そして言葉がそこに属するものであつたら、言語論は歴史と文明にはならないだろう。

ジャック・ラカンのようにへ無意識は他者のディスクールであるゝ、へ無意識は言語のように構造化されているゝといつて、生産共同体性を言語化してみるのは、生産共同体性が歴史・法的言語からの否定という図式をとれないせいである。即ち無意識が文明人の性質であ

り、生産共同体は意識以前なのである。距離・角度・分裂以前なのである。

それにしても（ともう一回）、

〈書く〉とは優れたものに行きつくしかない。それは絶対に神秘的領域で、しかも神的領域なのであろうか。ランボウ風に、書くとは、そしてまた歴史とは優れたもの、神の光を発見すべき道程なのだろう。書くことが優れたものに連なり、優れたものとは神に連なるきり仕方のないものなのだろうか。

言葉が神であつたら、言葉は神を発見するより仕方のないものなのだろうか。

七

キリストがいて、キリスト教があるので、人間は思い出すことが可能なのである。即ち人間に〈歴史〉というものが成立しうるのである。歴史はキリストに許容されている。

十字架を背負つて処刑場に行く時の彼は多分みずばらしく、〈罪人〉にふさわしかったろう。誰も罪人であることを疑つてみるほどのことはなかった。真正正銘の罪人であつたのだから。キリストは歴史と文明における罪・生産共同体性である。十字架は言葉に似ている。彼は死へ向つて言葉をにないつづけたのである。

言葉は家族にも同志にも国家にも共信されなかつた。それは死への道具であつたから。誰だつて、乞食や死を裏切れることは人生に相応しい。そして十字架上の言葉、

それは自己自身としてイエス、あるいは、イエスがじぶん自身としてのじぶんというものを、やや信じかねてきつつあることを意味している。（『言葉という思想』）

信じるという、言葉の共同体の為には自己というものはありえない。信じるためには〈アリバイ〉がなければならぬ。即ち歴史と文明と社会とが必要なのである。それらに頼らないで〈信じられるもの〉はないから、〈自己自身〉を信ずる我というものは存在しない。それでキリストは急いで周囲を見渡して、「これは我が母、我が兄弟なり」というのだから。（『マルコ書』）

こうした時、とにかく言葉を発する自己というのは、歴史にも文明にも含まれないもの・闇の中に尾をひたしている。歴史と文明に拒否されるのは生産共同体の性質である。またこの生産共同体性の漲りから出る言葉は歴史と文明に拒否される。

とはならないから、何かを話すためには最初の頁からマイナスに向つて、文明の死であるものに進むしかない。

「一切の幻想を、断固として退けなければならぬ。アブラハムにとっては、目的に達すること、結論に到ることは、出口に辿りつくことであり、出発点に立つことであつた。それは、人間の内面における人間の歩みである。」と森有正氏は日記（一九五九・三・二八）に書いているが、〈最初〉に立てばいい。

（作者好みの美少年がなくなつて）それを探す旅に出るといふ、高橋たか子氏の小説（『顕われ』『怪しみ』）に、

わたしが生きている時、わたしでない別の誰かがわたしの内部にわたしに重なつて生きているのがわかる瞬間があるのだった。死んだ人が、そうして、わたしの内部にあらわれているのだった。死んだ人は無くなつたのではないからである。

というジュリアン・グリーンの『V』からの言葉を使つている。そして富士聖心の修院のような所が出てき、「探す旅に出るのに、この黙想の家をえらんだについては、やはりそういう方が予感されていた。……修道院というものが、長年にわたつて累積させている層のなかに、なにか定義したい神秘が潜在しているような気がしたからである。」といふ。

そう、「生きている時」、死んだ人（文明からの被虐としての生産共同性）が、作者の中に姿を現わすのが〈文学〉といふ、思い出の記録なのであり、そこは修院に累積された神秘の方向にある。〈定義したい神秘〉、あるいは神とは、死・生産共同性の別名であり、それが文学や宗教に関わる。

「ルールケにとつて詩とは、原始にして根本的な彼の靈感が流れていく回路だったのである。」（森有正『日記』一九六八・一・八）とのように、人は繰返し言つてきている。原始にして根本的な靈感はある種の方向をとる。これは〈言葉〉といふことの可能性であるだろう。天才が書いた詩だからというよりは「原始にして根元的な靈感」によつてだけ、文・言葉が可能なのである。

九

中村雄二氏の『共通感覚論』に〈生きられる場〉とか〈生きられる時間〉とかいふ言葉があつて、これはまことに人類への差別語なのであるが、吉本隆明氏風には、そんな場所はない（『言葉という思想』喩としての聖書）とすれば、人は〈生きられる場所〉へ〈そんな場所はない〉を往来しているらしい。〈生きられる場所〉がなければ勿論学問も文も不可能であろう。

〈生きられる場〉は他人のものであつて、自分にはないのでという関係なのであろう。この世には他人の言葉しかないのだから、自分

の言葉は信じられない。信ずるとは社会へのバランス、生存のアリバイなのであるから、自分の言葉というのはアリバイにならないから、それは歴史によつて証明されるしかなく、ふとしたら歴史というのは何かを証明するようにあるのかも知れない。

この裂けめ、幅は、多分、それは言葉が独立し、外在化し、法化した時に出来た。言葉が外在化した時(法化した時)、言葉は人を使用する。「道徳は外を制して中に達せんとす。即ち求心的なり、宗教は内を化して外に及ぼさんとす、即ち遠心的なり、道徳は法にして、宗教は情なり。」というのは内村鑑三(『聖書之研究22』明治35・6・20)であるが、考へ、え、というのは明治で一応出来ていたのではないか。

〈生〉は生き残る―歴史に関わり、魂は敗者・死滅に関わる。内村にしたつて、その言葉(論理)は二者の間を這いのぼるしかない。

文学史上、〈物語〉がカグヤ姫や義経といった貴種流離のパターンを喋ってくるのは、その貴種と流離の間を(主人公)で埋める、だから主人公は二者の間で動き喋る、それは根元への希求と崩壊の悲しみの表示である。物語といわなくても、人が話を思い出す、語るのは貴種と流離の〈幅〉を埋める言語表出なのであるろう。文学史という歴史がそのように実行してきたということは、幼児などもその言語作用・物語・思い出において、矛盾の幅を埋めるように発想して行くことを推量させる。素直に育てば発想と論理と文は一致する。さて〈流離〉というのは追放の性質ではないか。だから物語は追放性によつて基礎づけられる。このことは案外確認しておいてよいことではないか。追放性が貴種の性質を呼ぶわけである。追放性によつて〈懐しさの記憶〉がつむぎ出されて来たのであると。

追放性というのは多分、生産共同体性からの視点であるだろう。その目に神・貴種が映る。神が異相で姿を現わす。そして物語はそう語る。〈語る〉のは生産共同体性の情熱によるのであり、物語が人間的であるのは生産共同体性に基盤をおく故であろう。そこが(生きられる場)の基礎なのである。〈そんな場所はない〉と云えば、生産共同体性からの視点(欠落していること)にならう。

〈言葉〉がわかることは喩がわかることだ。(喩としての聖書『言葉』という思想)

という性質がなければ人は外在(法的言語)によつて集団を形成しなければならぬ。この時、人は自分を守るために、言葉を法律の水準で喋る。それは共通理解となるはずだから、主張と錯覚が共存しよう。即ち法性言語は、そうでないものを遮断しつつ完結する。ここでは外在性が生存に一致する。すべての言葉がアリバイとして用いられる。

逆にここでは〈優れたという性質〉〈高貴なるもの〉は金輪際成立して来はしない。そしてその〈なんでもないもの〉が力として作用するのは法律に似ている時である。

あるいは善意も悪としてしか反映しない。秩序は自らに似ないものを悪として措定する。行為が不正であるように、人は言葉や論理に

よって糾明するわけであるが間違ふことができるのは言葉であつて行為ではない。

アリバイを持ってない文学には原因も結果もない。〈文学〉はすつぱり歴史から抜け出す。かつて歴史ではなかったもの、未来にも歴史でありえないもの。そうした宙吊りが成立してくるのは、追放されている視点から物語が行われるからである。

そうした言葉（文学や宗教というの）は一体、何を証するものとしてあるのか。それは歴史でないもの、人生か。人生とは歴史ではないものなのか。

証するものとは、〈明白〉なものについて語ることである。明白なものとは〈原罪〉の構図であり、原罪とは生産共同体の崩壊のことである。

人間に於ては無と暗黒が一番透明なのである。文明性によつて憎まれる暗黒、未開、神の世界のことである。

回首七十有余年

人間是非飽看破

往来跡幽深夜雪

一柱線香古窓下

というのは良寛の詩だが、暗闇だけが透明である。生存が透明なのは猫や木の葉だけだ。だから人間では原罪だけが透明である。そう、原罪から人間が生まれて来たのだから。そして原罪からの許容によつて歴史があつたように、動物からの許容によつて文明があつた。

十

木の芽の 風の音 猿の声 川の流れ それが全部残っている それは文明への善意だから 一つ残らず復活する。万葉集の、

一四七 天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり

一四八 青旗の木幡の上を通ふとは目には見れどもただに逢はぬかも

一四九 人はよし思ひやむとも玉かづら影に見えつつ忘れえぬかも

という表現では、作者たちは当然〈鳥〉に似ていた。魂を運ぶ動物に近かった。

すべて、復活することはかく動物性が基本であるから、復活は善意を傾向としている。キリストの復活が善意の角度内の出来事である

ことは歴史がいつている。だから生まれ変わったのがへ人の生存なのである」というのであろう。文明という歴史から共同体性に戻ったわけである。

高橋たか子氏の『怪しみ』の中の「頭われ」から引いてみる。

「靈魂に会えるのですか」

「強い祈りによればです」

「どんなふうにするのですか、教えてください」

「……祈りです」

「祈りかたを知らないのです」

「祈りを教えてあげましょう」

「目を閉じてください」

「両手の掌を膝の上に置いてください」

言われたとおりにすると両方の掌がそれぞれ膝の肉に吸いつくように感じられ、これまでこれほど安定した姿勢をしたことがなかった気がした。そして、掌の温みが膝の用にそっくりそのまま洩れることなくつたわり、それが膝から全身を経めぐって手にもどり、また掌から膝へとつたわり、完全な循環を繰返していく。命が純粹培養されて経めぐっているのがわかった。

という風に書かれる。これは一つの云い方では、子宮回帰の状態であり、自己完結の形である。「目を閉じて」は秩序の形が消える。血脈、手（掌）から脚（膝）を結んで循環し、自己が丸くまとまってしまった形。もう一つには、歴史的、生活的な種々を越えて生産共同体性に回帰した、すっぼりと閉じこめられて安定した形でもある。ここでは人は復活し、生命となり、言葉が可能になる。

靈魂に会えるというそこは死を取り込んだ場所、生産共同体性である。復活したものが人間的であり、そこから言葉が可能になってくる。

「なんと言えばいいのかしら、私はいつも思い出しながら描くのです……」（右同）

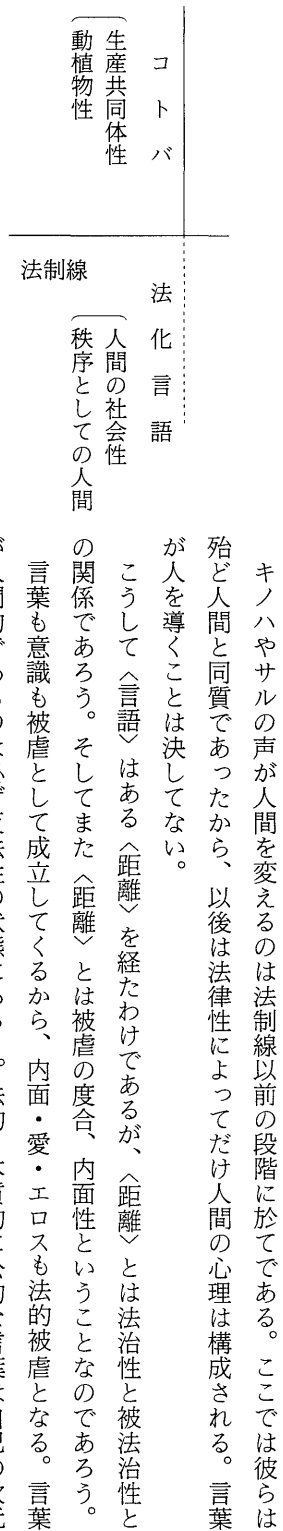
という絵には復活が描かれている。としたら思い出しながら話せば言葉は可能になる。なにを、当然文明からの死であったものを。

「芸術とはそういうものです」

と。芸術といわずとも、文学といわずとも、言葉を成立させているのはそうしたものである。

たとえばキノハ・木の葉というものがあって、それは律令制以前にも当然あった。あるいは文法化される以前の言葉であった。その頃キノハは勝手に生き、自由に動いていた。それを取りあげて、その性質を生かそうとするのが多分、文学の世界なのである。それは法律には勿論、教科書や文法書や辞書の世界には入らないものとしてあるだろう。

文明の社会では「言葉」が人を変えることは決してない。人を変えるのは法律である。言葉が法律圏内に突入すると言葉の法制化が行われる。



歴史を形成する者が私的であることはない。教会を作ったペテロが死刑囚キリストの同伴者でありうるわけはなかった。宗教だって、それは言葉でしかなかった、と思うことはほんとに面白い。

さて、人生に最初にやってきた正義の使者は「法律」であり、その従者が「学問」であった。説明されるような文学は文学ほどのものではない。論理は秩序へのバランスであり、アリバイである。文学にアリバイなどありはしない。論理は宿命としてアリバイも証明しなければならず、アリバイへの服従は秩序に似るしかない。

歌でも、本意というのは序詞からの喩である。即ち意味というのは無から喩なのであって、アリバイを探しようはないのである。

谷川健一氏は「豊玉姫考」(『著作集2』)で、

いずれにしても、こうした動物たちを神聖なものとしてまつる感情の中には、彼ら「他界」の生物が「現世」に姿をあらわすときの合一感と無縁でないものがある。なぜならば、そこには族霊の感情が働くからだろう。動物たちがおとずれるときの方が意識の常態であり、それらが姿をみせないときの方がむしろ「常態を欠く」時期なのだ。

とっている。生活と感情を規定するのが秩序や法律になると、その「常態を欠く」時期が常態になるだろう。法を操作する生活というものが成立すると生産は対象化される。生物も法を操作する人間によって対象化された。

秩序内人間が自らについても、対象についても、それを語るのには論理なのであるが、この時、人であるものが人について語る言葉はどんな意味も持ちようがない。だから文学や宗教は人間でないものによって語ろうとする。

文学を歴史化した、あるいは歴史化された文学は勿論「文学史」なのであるが、文学史に文学が含まれることもまた決してあるまい。

十一

会話の一言、詩の一行などは、その意味・解釈の全体量より優れているだろう。単なる「上つ面」が人生の喩であり、従って肉体などは案外、宇宙に似ていよう。「上つ面」は全感覚の統合の度合なのであり、だから内面（深層）は喩的共同体である。共同体というのは意味への喩なのであろう。

上つ面は個人の性質で、それは意味という複数の性質（合法性）を拒否する。対して人と人とがある時つるんだ感覚は何処へも成就しないだろう。いやそれは歴史というものになる。上つ面は共同体性、即ち前法治性であるが、つるんだ連帯は擬共同体性（法治性）である。意味のあるところには法的奴隷性が住んでいる。法律は上つ面を持って、意味だけを持つ。

たとえば「ヘミズ」といったら、生産共同体性と文明性の最大角度、九十度の間、四十五度線を立ちのぼるそれなのであろう。これは意味的な水であるよりは、全く具体的であるしかないもので、「経験」というに似ている。あるいはそれは「上つ面」の感覚なのであり、感覚という意味なのであろう。

文学に於ては二人以上の複数の同意見はひたすら憎悪として作用する。それによって言語の不可能性が、個人、農耕生産共同体性、未開性、幼児性などの中に閉じこめられる。だからこれらの性質が文学に向って発言することは難しい。

文明性が未開性に対して犯罪的であるのは、文明が未開に向かつて話しかけねばならないからである。話がなければ「犯罪」はでて来

ない。未開が話しかけるということは文化史上決してありえないから、彼らは〈犯罪〉を形成することはない。

自然はエロスの貯蔵庫なのか。だから言葉の法性を去った都合だけ、言葉はエロス化する。文学がエロスであるのはそのせいである。自然は本来性欲と食欲で構成されているから、法性化されない言葉は性欲と食欲に似ているのである。

古事記などはその性欲と食欲を獲得するための方法を書き連ねたものであろう。それ以外の理由が付加された文学は法性と文明への阿諛である。法性への阿諛文学が肯定されているのは、文学が文明の性質だと錯覚されたせいだろう。源氏物語など法性化したエロスである。

時間という秩序の性質に心が侵略されると、霞がかかったように、存在と人間が離れて行く。いわば〈待つ〉ということの中に、具体性が薄められる。目的の中に、待つという手段が合法化される。秩序という稜線の向うに生活の具体性が価値を没したわけである。

十二

まだこの世で、学問などというものが行われたことがあったであろうか。あったのは、人が生まれついで汚れ、いわば体質の合理化だけではなかつたらうか。

〈論理〉というものがもしあったら、それはひたすら矛盾の別名なのではないか。矛盾というのは動物性と文明性の合間である。

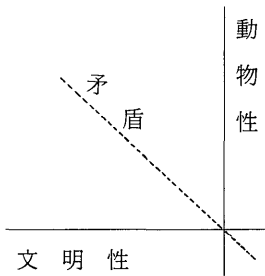
矛盾というのは言葉という表面性である。それはひたすら一筋のようであつて融合性、ズルサを持たない。それは存在の総合性であり、また生産共同体性と法治性との関係である。

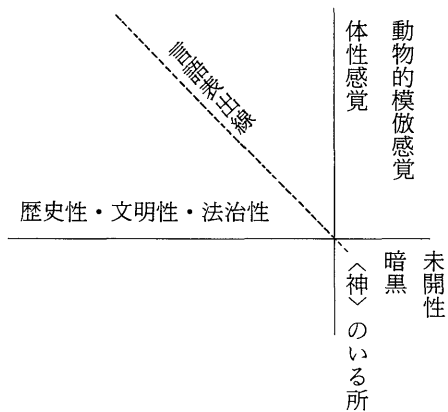
矛盾の統合としての〈言語表出線〉は動物と文明からの距離・四十五度線を上昇する。その尾を未開性・暗黒・神のいる所にひたしている。

〈神〉元始に 神が 天と地を 創造した、その神は故に絶対総合性である。言葉がそこから生い育つのは当然である。

元始に 言葉があつた 言葉は神であつた 万物は彼によつて創造された 言葉は 肉をとつて 人となつて われらの内に 住まわれた、というから、言葉は神から出、動物と文明の統合性なのである。

そして四十五度、この角度は言葉というものがある〈距離〉なのではないか。





四十五度線とはまた〈宇宙〉への〈方向〉である。

ある〈距離〉をとるたつて、それは〈表現〉でしかありえない。だから距離と角度と表現は等しいのである。そしてこの等しいとは上に挙げた〈図〉のことである。

この〈言語表出線〉は宇宙が自らするドラマなのではないか。この言語表出線は最初と即ち方向と現在と永遠の宇宙が、どこを切つても同一瞬間に姿を現わすだろう。上っ面・断片がそのまま宇宙のするドラマとなるだろう。

記憶の糸を手繰る、考えることが〈話す〉ことであれば、それは暗黒と原罪を汲み上げることであった。考えることが話になる。考えることと、話と内容もまた同時であった。

図式とは真理の構図なのではないか。それが幅であり、角度であり、距離でもあろう。文を綴ることが言葉であり、話をするのが言葉であるのは図式を作ってみることである。

「元始に、神は……（天地を）創造した……元始は、詩篇九十の言う『永遠から永遠に』また『今日』（詩篇二）と同じであり」
 犬養道子氏は『聖書の天地』にいわれる。「今」と「永遠」と「元始」は等しい、と。これが、神が、あるいは人間があるという〈距離〉なのであろう。

対して人間が考えるということが、もし真理に対して（向つて）あるものだとすれば、それは幅、角度、距離、矛盾への消滅の努力である。それは無距離の志向であつて、〈考える〉ことの消滅、歴史への融和である。

論理というものがありえたら、それは奇蹟である。その時、論理の前歴は透き通つていよう、即ち論理とは透き通つた所からの照射なのである。原罪の図・距離からの筋道である。「無限世界があつて、そこからすべてはくるのです。それが思い出すということです。」「頭われ」「怪しみ」

未開も暗黒も神のいる所も、言うまでもなく文明によつて憎悪され、仕上げられたところである。同じ場所から出て、動物模倣感覚と体性感覚は、文明から九十度角で生きつづけた。

典型的には生産共同体が律令国家によつて拒否された、人間に支配と被支配がはじまった、そこから一切がはじまった。言葉とは生産共同体崩壊の悲しみのエネルギーであつた。そして同じものが〈愛〉と呼ばれるものであつた。

「わたくしから離れては、あなたがたは何一つできない」（ヨハネ）というように、この言語表出線を離れては、人は何一つ話せまい。「真理を行う者は（何人にあれ）われに出会ふ」だろう。四十五度線という元始と方向と現在が同一瞬間に等しいものが真理なのであるから。

取って食せ。これはおまえたちのために渡されるべきわがからだ（マタイ）

について犬養氏は、

それと共に、「彼」を食し飲むことによつて、「彼」と一になるのみならず、「わたしと天父は一」と彼の語つた、その天父とも、人間は一になる。また食す者が何万何兆人であろうとも、一なる「彼」を食すことによつて、互いは互いと一になる。もつとも深いところで、「彼」を通して真の兄弟姉妹となる。そのみならず、彼を食さぬ人々とも、「人を愛して生命を抛ち人を生かさんかため抛つた生命を再び取り上げる」彼によつて兄弟姉妹となるのである。（『聖書の天地』）

と云われるが、へ食し飲むことによつて一になるのは、唯一、生産共同体の性質である。

例えば内村鑑造がピレモン書を訳して、

基督の為に功效をなすに至らんことを、——即ち爾曹に帰せずして之を基督に帰するに至らんことをの意なり。

というのは、善行は生産共同体の性質だから、個人に含まれる性質は生産共同体に属するものであるといっているわけである。

イエスキリストに於て男あるなし、女あるなし、ユダヤ人あるなし、異邦人あるなし、貴族あるなし、奴僕あるなし、

というのはただ共同体の性質である。そしてこう捉えられるへキリストというのは共同体崩壊の悲しみのエネルギーなのである。共同体から法治文明へのへ距離である。

葉々の風音

猿が鳴いた

凍った吹雪

岩魚のいた岸

雨

ふくろう、夜

全部復活する

金魚のあぶく

全部生き返る

〈復活〉した時、生きるみたい

十三

復活とは原罪を消すことなのだろうか。

言葉を文法化する作業がある。それは言葉が文学化してもらおうと困る人達の必死の共謀なのであろう。だから語学というものを職業にすると、〈抵抗力〉の全き喪失を意味する。語学というのは秩序なのである。学問は文学への悪意である。

〈現世〉に対して、そっくりな〈常世〉があつたとき、なぜこの二元性が必要とされたのか。それは生存に於て、その常世からしか、言葉が鳥に乗ってやっつてはこなかつたからである。そしてその言葉を受けとめることができたのも、四十五度角の、動物感覚側だけであらう。古事記に「其鳴音甚悪」とあるのは文明人の錯覚である。文明側が動物感覚側を対象化してしまつたのである。ここから不幸と憎しみが人類に始まつた。不幸とは動物への人間の甘えである。

動物と植物にだけ無償の献身が可能である。人間がそれらが無償の場に追いやつたのである。動植物と人間が分かれたのは多分〈法律〉というものができたときからである。その証拠に、人間は動植物に法制を免除している。

パリサイ人の学者ら、イエスの罪人、取税人とともに食したもうを見て、その弟子たちに言う、「何ゆえ取税人、罪人とともに食するののか。」イエス聞きて言いたもう、「健かなる者は医者を要せず、ただ病める者、これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来たれる。」(マルコ)

聖書では、なんと〈学者〉は激しい拒否に出会うことか。正しき者とは歴史の性質であり、学者とは歴史の用心棒であつた。

対して、右様の言葉に人が気づくのは、夜の外に雨が降り、冷気が流れ、風の吹く音によつてゐる。これらは歴史の性質ではない。

この世には正義を信じられない人、自らの合法性を感じられない人がいる。そんな人には、必ず生きること、〈原罪〉がある。生きるという歴史の性質を信じられないのが〈原罪〉である。それは〈罪人〉に似てゐよう。

そう私が思う時、右のマルコ伝の言葉が思い出の中を流れてくる。この〈人の思い〉は無智の共同体のことである。あるいは人間が無智であるものままで考えが届いたことである。ここではだから、人間の生存は、悲しみのように許容されているだけだ。正義はない。

原罪をひきずって生きることが、自らを原罪に化すことである。そしてこの〈原罪〉だけが存在（宇宙）への抜け穴なのではないか。冷たい空間の中を、猫の声が私に届き、私の耳が猫にとどく。私は猫の声に似てくる。無智の共同体が成立しよう。無智の共同体に意味はない。この無智の共同体から人生の意味を引くと〈原罪〉が残るのだろうか。人生の意味から無智の共同体を引くと〈原罪〉が残るのだろうか。とにかく原罪は学者の背中のようなものである。智慧が失ったもの。

この世に善意がなかったら、人間は不幸への意志を持ってまい。秩序という権力的バランスも人間の善意に肯定されて可能である。善意からは不幸と権力は似ている。〈善意〉とは歴史と文明に拒否された生産共同体の性質である。

〈優れたもの〉は人間の悪意を条件とする。不幸は現実に姿を現わしたが、文明という悪意の性質によって可能な〈優れたもの〉は秩序によって分解されないから、目に見えないもの、〈神秘〉としてあろう。

「なに偉そうなこと云ってるの」

と親や子がいふのは〈女房的リアリズム〉なのだ。吉本氏は「喩としての聖書」の中でいうが、この時、家族の者は「偉そうなこと」を知っている。そして「あれは大工の子じゃないか」と家族・歴史の水準に持つてくる。家族というものがあるのも一番歴史に近い。キリストは歴史から隠れた。その本当の隠れ方が死であったのだろう。

法性言語は矛盾の克服のように存在する。それは馬の屈辱を踏みこむ。馬は屈辱を許容するが故に馬鹿面をしている。〈原罪〉を思い出せるのが罪人だけであるように。知性によって思い出せるものはなにもない。

法制化言語は犯罪を外在化する。テレビで〈ホームズ〉という猫がでてきた。その猫は犯罪を立証し、犯人を作る働きをする。猫も人間に似て法制化させられてしまった。〈自分はやっていない〉などと訴えている人がいる。警察や刑事と犯罪に何の関係があるのか。人はその言語を失ったとき犯罪も失ってしまった。

猫も、人生が何かの正義でもあるかのように思ったのであろうか。

言葉を法制化できない人は、そう、生活できない。歴史に含まれることはない。現実的にそれは苦や不幸としてある。ワタクシには合法化されるものなど何もないから、苦や不幸はワタクシであることの性質である。

人が生きるのは倫理とか思想とか、まして神の言葉などによって生きるのではない。生きるのは食欲や性欲によってである。これが少くとも歴史という意味である。

キリストは、一語を以て世の苦を消すと言うようなオートメ式の救いの方法をとらなかつた。かえつて、苦を、自由に使い切り、支配しつくすことによつて新生のよろこびを創造した。〔聖書の天地〕

としたら歴史も、その自由を、自由に使い切り、支配しつくすことによつて歴史を創造した。不幸は幸福の別名なのではない。そうしたことは歴史上の人物が言うことで、歴史によつて拒否された者の言葉ではない。

人は判るところにはいない。人のいるところは法の内部であり、歴史上であるから、判るところは人生とはそれこそ「距離」がある。生産共同体性は文明という歴史によつて拒否されたのである。文明であるものが話すことはない。

この世には二つの心がある。そして多分二つだけしかない。一つは生産共同体性の網の目のように張っている心。一つは法律の上に網の目のように張っている心である。この心の張り廻らし方は唯一の意味で異質である。そして人が法律の上に網の目のように心を張らせることができるのは生産共同体の、原始的透明なものによつて許容されてだけ可能である。いわば文明は暗黒によつて許容され、幸福は不幸に許容されてだけ可能である。

だから判かるということは生産共同体の透明な構造からの照射、許容によつてである。即ち人間は行動に於て間違ふことは決してないが、生産共同体の透明な照射からによれば言葉が間違ふことができるだけある。多分、その故に人間には「学問」という理性作用が可能なのである。行動の間違ひというのは法律の水準にだけ存在する。法律など虫に許容されているだけだ。

人間は善意をくらくつくす。歴史と文明は善意をくらくつくす。善意をくらくつくすのが勿論悪意である。くらくつくしてカスが残る。そのカスみたいのが生産共同体の性質である。カスは文明の栄養にはならない。

しかし、本来的には「生きる」とは自然であるものの部分、自然の構成要素なのである。魚が海の中で呼吸するのも自然である。魚には「歴史」がない。しかし生きていくことはある。

なにも歴史と文明であるものが「生きる」ことをくらくつくすことはない。生きることの本来に於て「悪意」は邪道である。文明にお

ける言葉は悪意の手段になってしまった。学問というのは、文明即ち悪意の合理化作業ではなく、生きること即ち善意の正当化への努力なのであろう。

言葉は倒立して、文明を説明しはするが、〈へ生きること〉について語ることはなくなった。

文明とは給料に比例する。したがって給料取りが〈へ生きる〉ことについて語ることはない。文明は暗黒を表現することは出来ないからである。

法はある序列・秩序の下に発想される。だから法には必ず秩序や序列が内質として含まれる。即ち法は支配と被支配の合法性である。人が言語を論理として、話し合いなどとして使用できるのはそのせいである。〈言語学〉が存在しうるのはその合法性によっている。というより、言語学などという努力が言語の合法化に寄与しているのである。奴隷の努力はすべて合法化への協力のようなものである。

こうしてどんな言葉によっても、人が気づくことはない。人が言葉によつてのつかるのは法の網目の上だけである。だから人が話すことはない。話しは秩序が秩序へする同一性の連絡記号である。

人が何かに気づくには、またこの国語学概論を抜け出さなければなるまい。